

第16回 教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生

2022(令和4)年6月9日

会場 円徳寺

講題 : 「『教行信証』 念仏成仏是真宗 」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

どうも皆さんこんにちは、今日は天気良かったですね、ようこそ来てくださりました。田畑先生のおかげで、皆さんの前でお話をさせていただいて、また、質問をしていただき、帰る時に、またいろいろ考えながら帰って、またお話させていただくということで、私にとっても大変勉強になります。大変ありがたいご縁を頂いたと思っております。本当にありがとうございます。

まあ、いろいろとありますけれども、個人的なことを申し上げて恐縮ですが、ここでこの間お話をした次の日に家内が退院してきまして大きな花束を初めて人に渡しました。一ヶ月ちかくなりますけれども、少しずつ、まだ十分歩けないのですが、少しずつ体力が回復してくるだろうと思って安心しています。まあそれからバタバタしておりまして、本を書く時間がなくて、バタバタしておりますが、2～3日前は北陸の小松で話をして帰って来たばかりです。

その前の日はこれはちょっと面白かったのですが、博多で大きな企業の、コンクリートの、なんというかそれは大きな鉄筋コンクリートを作っている全国チェーンの会社だそうで

す。その研修会に呼ばれて行って来ました。私の友達が大成建設におりましたので、それは前から聞いていたのですが、今は、やはり昔と違って大きな企業では3割は働かない人がいると、必要経費で会社は初めからそれを見越していかないといけない状況にあると、それはブラック企業だろうと思って、今度の会社でもそのことを知人に言いましたら、そうではなく、全国平均3割くらいはほんとに働かないと。

1割はうつ病、若い人を中心にして1割は完全にうつ病なのだと、だから、あと1割は働きたくないから、私もうつ病ですというて病院で診断書を取ってきてうつ病だというのが1割いると、あと1割は、これはどうしようもないのですが、釣りバカ日誌の浜ちゃんがおるではないか、会社に行かないで好きなことばかりしている、会社を首にならないようにうまく考えて、昼前しか来ないとか、そんな者首にしたらいいいではないかと言うけれども、今は首にすると裁判になって面倒くさい、いちいちそんなやつを相手にして裁判をするくらいなら、仕事をしている7割で頑張ってるよりしょうがないということで無視をしているということでした。そんなふうに3割くらいは、会社にとっては働かないやつがいると思ってやっているのが今の会社の現状だそうです。

だからちょっとひどいですね。大きな会社なのでしょう。大きなホテルで研修会をやりましたけれども150人くらい若い人を中心に来ていました。もちろん男の人の方が多かったですね。何をしゃべればいいのか、私の話など何の役には立たないぞと言っていました、「苦からの解放」というテーマで話してくれというから、それだったらしゃべるけれども、なかなか難しいと言ってはじめてけれども、社長が後のパーティーで言っていました、「今日はひとりも寝ている者がいなかった。一人も寝ていなかったと言っていましたけれども、まあ物珍しかったのでしょう。まあ聞いてくださって、また来年も来てくださいといわれた。

ので、なんとなく場違いな気もしますが、しかし大事な場所なのかもしれないという思いもしました。やはり一度も仏教の話聞いたことのない若い人たちに、まったく違う視点でこの苦しみというものをどう考えているのか、人間が人間の立場で人間のことを考えていくと、いいか、悪いかしからないから、そういう考え方でなくて、仏様の覚りは人間を超えたところから人間を見ているから、人間の苦しみと言っても、それは私たちの考え方とはちょっと合わないのだと言って、お釈迦様の話、親鸞聖人の話をしてきました。

まあしかし、物珍しいというのは、ああそんなふうな考え方があるのだなあ、というそんなふうな形で聞いてくださった方が多かったと思います。まあ、機会があればどこでも行きます。まあ、私の勉強のためですから、大変私自身も勉強になりました。

今、皆さん方と『教行信証』は行の巻の七祖のところ、これから少しずつ勉強していくとわかりますが…、先ほど、田畑先生がおっしゃっておられましたが、もしも全部終わらなくても…、これ昔から真宗学という学問はこういわれているのです。「行信半学」。行の巻と信の巻をやれば、それで半分以上終わったと思いなさい。それが昔から言われている内容なのです。ですから少し時間をとっていますけれども、行の巻と信の巻は少し時間を取って、ゆっくりお話をしなくてはと思っています。しかし行・信が終われば、まあ僕が死んでも大体しゃべったことになっているから大丈夫だと思っています。その中で行・信というのは、皆さんおわかりのように行信不離でしょう。ですから行の巻と、本で言えば行の巻、信の巻、

証の巻とこうなっているから、横並びに見てしまうのです。

そうですね、そうではなくて行信不離だから、行の巻と信の巻はこれ重なっているのです。重層的に重なっている。そう読まないとおかしいのです。これは私の意見ではなくて、もともとそういうものなのです。南無阿弥陀仏と帰依して頭を下げる信心と、念仏申さんと思ひ立つ心、それは一つなのです。だから平面的に書けば行の巻、信の巻という順番になったとしても行信二つ重なっている。そうなるとうどうなるかという、行の巻の前半と信の巻の前半とは同じことを言っている。行の巻の後半と信の巻の後半とは同じことを言っている。ただ行という視点で言うのか、信という視点で言うのか視点が違うだけで同じことを言っていると考えてもいいのです。

そういう意味からすると、今は行の巻の前半七祖のところ、その七祖のところの山、一番の核になるところは、この間お話をした親鸞の名号解釈です。ここが一番の行の巻の前半の山になります。ですから皆さんここがよく理解できておればずっと行きます。ところがなかなか難しい、善導大師の六字釈、これを親鸞聖人はわざわざ名号解釈として読み替えた。それはこの間お話をしましたね。善導大師の方は『観経』によって六字釈を書かれた。これは浄土教の歴史から言っても金字塔と言ってもいいお仕事でした。ところが親鸞聖人はこれを『大経』によって六字釈を本願の名号として、本願と直結させながら、本願の名号として書き直した。これは、それはいろんな言い方ができます。いろんな言い方ができますが、もうわかりやすく言うとうどういうことかという、『観経』では「名号に帰する」ということが起こった時に、善導大師が言うように帰命と願生(発願回向)と、仏様に初めて頭を下げて、そしてこの世を超えた世界があるのだということに感動して、身は凡夫だから今すぐに悟ったというてしまえないけれども、命終わるまで本願を生きて、『観経』の表向きから言えば皆さんわかりますね、命終わる時念仏称えなさい。下品下生では、そして仏様が迎えに来るから、命終われば浄土に往生して覚りを悟る。これが『観経』の表向きの言い方です。一応『観経』の表向きはそういうことになります。臨終に仏様が来迎して迎えに来ると。南無阿弥陀仏と称えておれば、必ず仏様が迎えに来て浄土に往生決定して仏になるのだと、そうするとどうしても聖道門から非難されるように、「浄土教というのは死んでから先の話か」、こういうふうになるわけです。そうですね、それでは仏教にならないのですね。

親鸞聖人は要するに『観経』は表向きから言えば、『観経』には深い意味があるから、『観経』の深い意味というのは人間の「機」というところに重心があるから、仏様に帰命したとしても身が凡夫だから、命終わるまで悟ったとは言えない。命が終われば、この身が消えて悟っていくのだ。だから命終が往生と成仏を決定するのだという、この身、凡夫というところに機の真実を説くのが『観経』だから、凡夫の身というところに中心をおきながら浄土教を表現しているのです。そうするとやはり正直に凡夫の身が終わらないと覚りに帰ったとは言いきれない。こういうのが『観経』の表向きの言い方なのです。ところがそれでは仏教にならない。

仏教は何と言ってもお釈迦様が覚りを悟った、それが仏教の基本でしょう。だから、聖道門がこんなものが方便で、凡夫を仏教に導くための方便なのだ。やがて死んでから覚りを悟るなんて言うのは、それは凡夫を仏教に導くための方便なのだ、と非難されたのです。だか

らはっきり申し上げます。親鸞は『大経』によって「今の救い」を説いた。『観経』の方は死んでからの救いになる。だから親鸞は『大経』によって今の救いを説いたのです。それを現生正定聚という言葉で表します。現生というのは、今生きているときに、正定聚というのは必ず仏の覺りに帰る。必ず仏の覺りに命終われば帰るけれども、それは「今、涅槃の覺りに包まれている」からだ。というふうに、今の救い、ここに中心をおいて仏教を語ろうとするのが親鸞という人の仕事なのだということをよく知っておいてください。

法然はどういっても、皆さんわかるように、名号に帰するということになる、「かの阿彌陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮(おもんばかり)なくかの願力に乗じて」(「信の巻」東聖典215頁、西218、島12-59)、この願力に、本願のはたらきに乗じて、乗って、衆生は本願のはたらき依って、やがて浄土に往生し、命終わって覺りを悟る。これが『観経』の表向きですね。

そうするとこの「本願力に乗じて」というのは本願に乗ってですから、『観経』の場合本願力が「縁」になります。増上縁、それに対して『大経』は救われていく「因」を明らかにします。因、それは信心、本願力回向の信心、願力に乗じる方の縁に対して、本願力の回向の信心は「因」になります。この間言った両重因縁の譬えというのがある、善導大師は光明名号を縁にして私たちは救われるのだ、しかしそれはどこまでの縁なのだ、だから因の「自の業識」というのがあると善導大師でもちゃんと言っているのです。あの人はわかっているのです。わかっているというのは失礼だが、あの人は偉い人だから、全部わかっていて、それを『観経』に合わせて、譬えで説いているわけで、だから善導大師は、ここに出てくるのです、七祖の引用が終わると、親鸞聖人は、今度は七祖をまとめてご自釈を書きます。

そこに当然のことだけでも、そこに善導大師が出てくるわけです。190ページ(西186～、島12-37)、「しかれば真実の行信を獲れば」、これまで七祖のところ「行」について尋ねてきました。だから真実の行・真実の信というのはどういう事かということ、それを獲れば「心に歡喜多きがゆえに、これを「歡喜地」と名づく」、つまり小乗仏教でいえば歡喜地なのだ。あるいは、大乘の菩薩道で言えば初歡喜地にあたるのだと、こういう意味です。歡喜地と名づく、小乗仏教では「これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶墮(らだ)なれども、二十九有に至らず」。この行信を獲て初歡喜地にたてば、もう二度と迷いに帰らない。

「いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず」。当然のことですが、南無阿彌陀仏と頭を下げた。頭を下げれば阿彌陀仏の大悲は、その人を摂め取って捨てない。だから阿彌陀仏というふうに名付けるのだ。「かるがゆえに阿彌陀仏と名づけたてまつると」。阿彌陀仏は根源仏だと言いました。ですから、出来のいい人も出来の悪い人もすべてを救い取る、摂取して捨てざるを、だれももらさない、だから阿彌陀というのだ。そしてそれを他力の救いというのだ。「これを他力と曰う」。七祖の引用を結んでこう言う訳です。これはよくわかるでしょう。

皆さん今まで行の巻を読んできましたけれども、龍樹のところ「念仏する人を初歡喜地の菩薩と一緒にだ」と龍樹は言っている、ということを読んできましたね。ですからここでも「初歡喜地と一緒になのだ」というふうに言って、それを「他力の救い」というのですとこう

言います。そしてそのあと、「ここをもって龍樹大士は「即時入必定」(易行品)と日えり。曇鸞大師は「入正定聚之數」(論註)と云えり。仰いでこれを憑(たの)むべし。専らこれを行すべきなり」。龍樹と曇鸞、特に大事なのだと、七祖の中でも龍樹と曇鸞が特に大事だと言うのです。

それで、今はっきり言います。龍樹は、今ただいまの救いを説きました。ですから「現生不退」、この龍樹によって親鸞は「現生正定聚」というのです。ですから龍樹は「易行品」で菩薩道に耐えることのできない者は「信方便の易行」の道があるとういうふうにして説いていました。そしてその易行の道は、実は、今、このままの救いを表すという意味で現生不退なのです。ここが親鸞が龍樹を必ず出す理由、「現生不退」、「今の救い」。龍樹がまず現生不退と言った。そして同じことを曇鸞大師は「浄土に生まれて正定聚に住する」と言った。だから「浄土に生まれて正定聚に住する」ということは、死んでからのことではなく今のことです。ということを行うために龍樹と曇鸞を並べます。浄土で正定聚に住すると言っているから、『観経』から考えると、それは死んでから先のことかと考えられるけれども、『大経』ではそうではないのです。浄土の正定聚を先取りすると僕は言いましたね。そんなふうに龍樹は今の救い、曇鸞は浄土での救い。それが一つだと。だから『大経』の浄土は死んでからではない。今、大きな仏様の大悲の中にあるという感動が実は、そのまま浄土の中にあるということなのです。というふうに、もう頭に叩き込んでおいてください。龍樹は今の救い、曇鸞は浄土での救い、それが一つだと言ったのです。

そういう意味で親鸞聖人が救いを語る時には必ず、龍樹と曇鸞を並べる。このことは今まで二回か三回言った。ただし、忘れないように言います。龍樹は今の救い、今の救い、忘れるな。曇鸞は浄土での救いを説いている。けどそれが一つだと行の巻を通してずっと一つだと言っている。だから浄土の救いと言っても今の救いを言っているのです。このことを頭に叩き込んでおいてください。それが親鸞聖人の『大経』の了解です。

そしてその次に、今申し上げようとした善導大師の両重因縁の譬えが出てきます。

「良(まこと)に知りぬ」。だからよくわかるでしょうという、こういう意味。「徳号の慈父ましまさずは能生の因闕(か)けなん」。これは難しい言葉だけど、要するに名号という父親がなかったら生まれることはできない。そういうことです。それから「光明の悲母ましまさずは所生の縁乖(そむ)きなん。能所の因縁、和合すべし」。つまり光明と名号の父と母によって子供は生まれる。一応それは言える、ところがそれは、父と母というのはどちらも縁であって、皆さん生まれてくるとき、もう忘れたでしょう。大体あれらしいよ。お母さんのお産の時に、生まれて出てくるときに全部忘れるらしいよ。それまで私は、どうしてもこの二人を父と母として生まれたいと、どうしてもこの世に生まれたいと思って出てくるのだと言われていました。

ところがお産が激しいから、その時に、どうしても出てきたいという自分の方の意欲を忘れてしまって、いつの間にか「おぎゃ〜」と言って生まれていたと。そして俺は何のために生まれてきたのかと悩むのです。人間は、それは生まれる時に、どうしても生まれてきたいということで生まれてきたのにもかかわらず、忘れてしまうからだと言われていました。

そんなふうに生まれる方の「何のためか」という。「俺は何としても生まれたい」という、

生まれる方の意欲がなければ、父と母だけでは生まれたことにはならない、そのことを書いてあるのです。だから、父と母と言うことだけでは生まれたことにならないから「能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらざは光明土に至ることなし」。どうしても「私が」という私の方の原因が、信心がはっきりしなければ本当の意味で救われたということにならない。こういうことになります。

だから救われるという時には、どうしても「私が、われが救われる」のだという。どうしても私が救われるということがあるでしょう。そこよ、問題は。言っていることはわかるでしょう。「自分が救われたい」ということ、それは別にして、人の本ばかり読むわけです。この人はこんなことを言っている、あの人はあんなことを言っていると、そして「救いというのはこんなことらしい」と、それは「らしい」と言えるかもしれないが、本当に救われたという時には、私がこのように救われましたという「私が」という責任がある。それが信心なのだと言導大師ははっきり言っている。だから、言導大師の方はむしろ縁の方を、光明と名号の縁の方を説いていっているけれども、因の問題は『大経』にかかわることだから言導大師は明確にしていらないと言ってもいいかもしれない。

それを本格的に明確にしようとしたのが親鸞聖人だと考えてください。ですから、私が救われる、今救われる。それは一体何かと言ったら、「本願の真実だ」ということになります。だからこちら側は、親鸞聖人の場合を見たらわかりますね、全部、帰命というのは本願招喚の勅命である。本願に直結している。発願回向というのは、如来がすでに発願して、如来の本願によって果たされているというふうに、親鸞聖人の場合は全部、名号のはたらきが本願に直結している。そうでしたね、本願に直結しているから、いいですか、本願に直結しているから、本願というのは仏さんの世界です。

帰命と発願回向、帰命は衆生に起こること、ところが衆生に起こることが実は本願と直結しているのですと名号解釈をひっくり返してしまった。それは如来の世界と直結しているのだと、だから逆に言えば、この衆生のところに如来の世界は開かれるのだと、それが救いになるのだと、直結しているから、当たり前ですね。そういう名号解釈をしたのが親鸞聖人の仕事なのです。

(註：第15回講義で記録：「本願の教えに依ってはじめて「帰命」と。仏様の教えは偉いと。自分が逆立ちしてもわからんことを先に見抜いてくださった。初めて「帰命」と頭が下がるのだと言うのが言導大師の「帰命」と言う註釈なのです。そしてその時に初めて、身の分別を生きるということがどれほど愚かなことか、身の分別を超えて一如の世界・仏様の世界こそが本国である。だから、できるかできないかはわからないけれど、生きている間、命をかけて仏様の世界に帰りたいという、そういう願いを起こすのが「発願回向」ですね。仏様の世界に帰りたいという願いを起こす。これが発願です。そして回向と言うのは、自分の人生のすべてを浄土の往生に向けていく。初めて自分の人生の方向が決まったのだと。私の人生はこれまで、どこに行くかわからない、けど初めて仏様の世界に帰って行くと、はっきりしたと。仏様の世界に人生をあげて帰って行きたいのだと。こういう帰命と発願回向と言うことが南無のところにあるのだ。こういう註釈を言導大師はしてくださっています。)

今、このままでなぜ救われるか、それは帰命と願生（発願回向）が本願に直結しているか

らです。だからなにもしなくても、本願の方は如来です。私たちは衆生です。衆生と如来とはもともと違うのです。それが直結しているというふうに説いて、如来の世界が、だから衆生に実現するのです。だから帰命・願生というところに仏様の覚りがそのままではたらいっているのです。というのが親鸞の名号解釈になるのです。

信の巻で言えば、それが「三一問答」になります。如来の本願は至心・信楽・欲生と、如来は三つの心で説いてくださっているにもかかわらず、衆生の方では「世尊我一心」と言うのはなんでか、一心と三心はどんな関係になっているか、というのを説くのが三一問答です。だから衆生の一心・信心のところに如来の至心信楽欲生という如来の世界が開かれて大涅槃の覚りをいただくのだということを証明しているのが三一問答です。だから三一問答と名号解釈とが重なっているのだと言っているのです。

行の巻では名号解釈、これが親鸞の核になる。信の巻の前半の山は三一問答だから、三一問答と名号解釈とが重なっている。それをよく見ると、今言ったように衆生の帰命・願生ということは、直接本願と直結している。それを丁寧に説いているのが名号解釈です。ですから帰命というは本願招喚の勅命である。衆生の帰命は如来の本願招喚の勅命である。衆生の発願回向は如来すでに発願して、如来の方が発願してくださって、その発願回向によって、私たちは浄土に生まれるということが実現する。というように、全部衆生に起こることが実は本願と直結しているのです。というふうに書き直したのが親鸞の名号解釈です。

そしてそれを一言でいえばどういうことかということ、「今の救い」を説いたのです。だって、涅槃の覚りに救われたというのが今の救いだから、阿難とお釈迦様の出遇いの時に丁寧に話をしたでしょう。

先日、小松に行ったら、いつか言ったことがあるでしょう。小松と高岡で安居をした時、安居というのはプロの坊さんたちの研修会・勉強会だから、あまり説教じみたことは言わないで、聖典をちゃんと解説して話していくわけです。そうしたら、前にも話したが、前にいた一人のばあさんが手を挙げて、泣きながら「助けてください」と叫んだばあさんがいたのです。「いや、私には助ける力はありません」「まことに申し訳ないが、それはあなたの問題だからあなたが自分で気が付く」、つまり「自の業識」、自分のところで本当にわからないと助かった救われたことにならない。解説していくら説明しても「ああそうかと、わかった」としても解説だから救われなんでしょう。だから「あまた、自分でわからないとどうしようもないのだ」と「俺が知るか」と最後には言ったが、そうしたら、また高岡まで追いかけてきた。

そしてまた同じように泣くし、今度は小松で話した、これは法話、ご門徒さんのところで法話をしている、ふとそのおばあちゃんのことを思い出して、ひょっとして今日も来ているかもしれないから言いにくいけど、と言って、実はこんなことがあったのよと、けどその時に本人が来ていたらやばいから、けどははっきり言うわと、多分そのおばさんは大まじめだから、そして大まじめで聞法をして、そしてよく聞くと旦那さんが亡くなってから、あと鬱になって泣いていると、だから一生懸命聞法をして「助けてくれ」と言っている。だから、これ人間のまじめさの極みです。これ以上ないくらいまじめ、だから本人はこれだけ一生懸命にやっているのだから救われなはずがないと思っている。そうですね、坊さんのところ

まで出てきて、在家の身で坊さんのところまで出て来て、質問して、わあわあ泣いて助けてくれという。これだけ求めているのだから、私ここまで頑張っているのだから救われなくてもいいでしょうと、本人は意識ではない本能で思っている。だから聞いている。もし救われなかったら聞くわけがないです。だから聞いている。

だから人間には意識できないほど深い「私こそは」という思いが最後まで残っていく。そしてよく訊いたら、やはりもうちょっと楽になりたいとか、苦しいですとか、助けてくださいとか言っている話だから、それだったらあなたの欲です。欲で救われるわけではないです。と言ってそのおばさんに言った。そして一つ二つ、高光大船さんの話をして、死んでいくという人に頼むから、うちの旦那が今死にそうになっている、だから来て何とか言うてやってくれと、暗い顔をしてだんだん死が近づいてきたら暗い顔になっていく、それは、おかしいでしょう。仏教の話を聞いて来たのだから、だんだん死が近づいて来たら明るい顔になって当然でしょう。それが暗い顔になってきているから、高光さんあなたの責任だ、「内の父ちゃんのところに来て何とか言うてくれ」と言うたら、高光さんは「なんか、そんな事、おれ知るか」と言って行かなかった。

しかし毎日毎日来るから仕方なく行った。ずかずかと入って行って「おい、お前、死ぬぞ」と言って帰った。そうしたら次の日から明るい顔になった。やはり死にたくないという根性が苦しめていたのと違いますか。それが切れないから苦しいのです。でもずかずかと来て、なにも言わずに「おい、お前、死ぬぞ」と言われた時に「あ、死ぬのだ」と思ったら、あーと力が抜けて「あーそなんだ」と言って死ぬというところに着地したのではないのでしょうか。それが人間出来ないのです。

さっき言ったようにまじめに必死に求めている。私こそ救われると思っているけど、それは絶対自分こそ救われると思っているのです。救われるに決まっていると思っているのです。だけどそれはこっちが説明しても分からないから、お前、「自分が気がつかないとだめなのです」と、だから説明してもだめなのですと、言うのはわかるだろうと言ったら小松の、小松というところは土徳があって、お西の人はわからんが小松六坊と言って、蓮如上人の一向一揆の砦があるのです。その砦が全部お寺になっている。ものすごく大きな寺です。それが今でも六坊が燃えたら自分のところのお金を全部出してでも建て替えてきたという歴史があるのです。だから聞法をしていく歴史があるから、わかっているわけですから皆さんが、だから「わかるだろう」というと「そうそう、そういうことだ」と言って…。

帰ってきたら、どうも、そのおばさんおっらしい。昨日速達が来て、「小松と富山の安居に行ったものです。この間の小松の説法も聞かせてもらいました。感動してめちゃくちゃうれしかったのです。もうちょっとでわかりそうな気がするから、この次どこに行きますか岐阜、名古屋、京都 北陸、全部予定を書いて送ってくださいという、はがきが入っていた。わかるわけではないのです。僕の言っていることわかるでしょう。

私という根性がスカッと切れた時、そのとたんに、大きな仏様の世界に目を開いた、そういう感動を頂いたのが阿難でしたね。それは今の救いです。そうでしょう。今お釈迦様に遇って、自分の根性の何とも言えない根性がたたき切られて、切られてみればもともとみんな友達だという世界に生まれてきていた、一如の世界に、比べる必要のない世界にもともとあ

ったのだと気づいたのが阿難でしたね。ですから阿難は今の救いを説いているのです。

だから『大経』は今の救いを説いているのです。今の救いというのは本願の世界に目覚めなさい。本願の世界は比べる必要が無いのですよと、比べる必要がないということはいつも言っているように皆さんそのままがいいのです。初めてそういうものに触れるのです。

この世の中で「そのままがいい」というものはない。このままでいいと言ったら居直りになるから、人間の方からこのままでいいと言ってはいけない。居直りと違うぞ、仏様の方が「そのままがいいよ」と言っているのです。仏かねて煩惱具足の凡夫と言っているのでしょう。だから初めて自分を立てる根性が切られてみれば、初めから救いようのない凡夫でした。しかしそのまま比べる必要のない仏様の世界にもともとあったのです。というふう到大涅槃の世界に、一如の世界にめざめていくのが『大経』でしたね。そうしたら『大経』は死んでからではない。教えに遇った今、そして比べる必要のない一如とか大涅槃とか『大経』ではそういう。同じことを『観経』では浄土という。そんなふうにして『大経』は、今の救いを、このままの救いを、さっき言ったでしょう。自分の立てたい根性が初めて切られた。その時に、このままどこも変えようがない煩惱の身である。この身はどこも変えようがない、しかし、「**仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり**」(『歎異抄』九章、東聖典629、西836～、島23-4)、こう言って私をはじめ凡夫でない人は一人もいない。しかしその人たちを「凡夫よ」とみて、一切の人を比べることを超えた一如の世界で救うというのが仏様のお仕事だ。このままで今救われていくというのが『大経』の救いです。

一如の世界から私たちにはたらきかけてきているはたらきを本願と言います。小松なんかに行く面白いよ、ばあちゃんが質問するのです本気になって。じいちゃんも「俺は」と、この間質問したじいちゃんは、大きなお寺の小松六坊の責任役員だけど正直です。「俺は一生懸命救われたいと思って南無阿弥陀仏を称えているけれども、一心に念仏しろと言われても無理や、俺はできない。どないしたらいいのか」「まあまあそうだ」、親鸞も同じことを言っている。唯円が「私は聞法をずっとしてきたけれども、今さら浄土に早く生まれたいとも思わないし、早く死んでしまいたいとも思わない」ということは、一心に念仏していても、念仏しようとも思わないのと同じ気持ちです。それを聞いた親鸞聖人はどう言ったか、「私も煩惱の身だから、君が言うことと同じだ。君といっしょだ」と、「もし、今すぐ死んで浄土に行きたいとか、一心に念仏ができるのだというなら、それは煩惱がないのではないかと疑わしい」と、『歎異抄』の九章はそう書いてあるでしょう。

煩惱の身だから本願の声が聞こえるのです。どう聞こえるか、皆さん人生の中で苦しいことがあるでしょう。つらいことがあるでしょう。それ、それを本願の呼び声と思いなさい。仏様に背いているから苦しんでいる。そうでしょう。つらいこと悲しいことある。その時、くそ、あいつがこんなことになるからなど、いろんなことを思うけれども、よく考えたら仏様に背(そむ)いているから苦しんでいるのです。ということは苦しみということを通して仏様の世界に帰って来いという仏様の方から呼んでいる、と思いなさい。だから、私たちの方から一如の世界に帰ることはできない。涅槃の世界に帰ることはできないけれど、仏さんの世界の方から呼んでいるというのです。「十方衆生よ、わが名を称えて我が国に帰れ」と

呼んでいる。いつも僕らはその声を見捨て、俺が正しいと思っているから苦しい。ということは、悲しかったり、苦しかったり、辛かったりしたら、それは本願から呼ばれているのだと思いなさい。そして仏壇の前にすわって「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と称えて、いろいろ悩み、考えたらいい、というふうに私たちの方から仏様の世界に帰って行くことはできないが、仏様の方から、私たちを促している声がある。

はっきり言うと、さっきのおばさんだけ、「そんなことお前の欲だ」と言って「欲だから、話にならない、そんなもので救われるか」と言ったときに「それでもね」と言わなくてはいけない。「それでも欲かもしれない。それでもずっと、わたし、それは消えないの」、と本気で言わなくてはいけない。そしてそれはよく考えたら、生まれた時からある心です。何かを求めて、それはその都度違うかもしれない、子供の時には勉強できるようになろうと思って頑張った。それも何かに促されて勉強をした。

言っていることわかるかなあ、わかるよね。生まれてから人間はずっと仏様に呼び続けられているから。その都度その都度、反応しながら苦しんだり頑張ったりする。だから最後にはおばちゃんのように、旦那が死んだ、死んだからもうどうしていいかわからないといっとう病になって苦しいと叫んでいる。しかしよく考えるとそれは子供の時からずっと人間の中にある心。何かよくわからないけれども求める心、それはあるのです。だからいい、言ったらいけないのですが、求める心さえあれば、求める心の中に答えがある。そうでないとそのままの救いにならない。絶対そうだから。だから求める心をあきらめた人はもう仏教と縁がない。あのおばちゃん、もうもう、それぞれ、本願と言ってもいい、求めている心は。と言っていいくらい来ている。けど、欲とは違うのだというふうに一回切らなくてはならない。

いつか言ったことがあるでしょう。十九願、二十願、十八願は「十方衆生」が共通にある。ところがもう一つ共通なのがある。あんまり人は言わないけれども「欲生我国」が共通。我が国に生まれんと思えというのが共通にある。だから十九願の自力の中にも欲生我国があるということです。二十願の欲望の中にも欲生我国があるということです。最後の十八願のところに来てははっきりと他力の欲生我国であったのだということがわかったら救いになる。だからその欲生我国は子供の時からあったということです。ただ本人がわからないだけです。僕は無茶苦茶言っているようですが、本当のことを言っているのです。だってそう書いてあるのです。

私たちには、仏教がわからなくて一生懸命に努力しなさいという時には、努力しか見えなから、一生懸命に努力して、さっきのおばあちゃんみたいに、頑張って、頑張ってパンクしそうになるほど頑張って「救ってください」と言って泣いているのです。そこに欲生我国があるのです。あるけれども本人は気が付かないのです。それを何とか本人にわからせなくてはならない。それはお前の欲ではないよと言って、「欲ではないけど求めている心があるでしょうと、それが一体なにかわかりますか」、と言いたいのですが、それを言うと解説になるから、そんなふうに本願ということがわかったら、直結しているのです覺りと、皆さんの命の底から呼んでいる呼び声がちゃんと本願だというふうにちゃんと着地した時に第十八願の救いが実現します。

それは十九願の欲望と二十願の欲望と分けて欲生我国がはじめからあったのですが、だか

ら十九、二十、十八という三願転入は欲生我国の純化作用だと考えてもいい。ちょっと難しくなったけれども、話を元に戻します。『大経』は私たちの根性が叩き切られた時に、このままで比べなくていい世界、もともとあった世界だったのだというふうに目覚めていく仏教でしたね。それがお釈迦様と阿難との出遇いでしたね。ですから、一如の方から、涅槃の方から 本願としてわたしたちに呼びかけてくださっている、その本願に目覚めなさい。

本願にさえ目覚めたら彼の覚りは目覚めた人のところに来る。因の信心のところに来る。因の信心に、どうしてこんな比べないでいい世界が来たのだろうと思ったときには、私の力ではなかった、法蔵菩薩がご苦労してくださったからだ、因の法蔵菩薩のところを仰ぐ、というふうに因と果、因と果というのが『大経』の本願のはたらきでしたね。いいましたね、なんべんも、因の本願のところにも果の覚りが来る。果の覚りが来た時に、法蔵菩薩の因を思うというように普通は因と果は別々なのですが、それが同時に実現するというのが本願の成就と言ってもいいし、名号に帰すると言ってもいい。だから名号に帰した時に初めて、果の覚りに包まれた、救われたのです。大きな感動を得た。それを言うための手続きとして、名号が本願に直結しているのです。それをちゃんと覚えておかないと本願の救いにならないから、だから親鸞聖人は『観経』の六字釈をわざわざ『大経』によって名号解釈をしておいた。

というのは、別の視点からいうと、今の救いに戻した。死後の救いを今の救いに戻した。と考えてもいいです。そこに親鸞聖人の『教行信証』の大きなお仕事があります。それが六字釈を名号解釈に戻したのだという意味になります。いいですかね、まあ何回も聞いているうちに、そうなるから心配しなくていいです。もうそれ以上、それ以外のことは考えられなくなるから、名号に帰すということは凡夫のままで仏様の世界にあるということをお教えされる。

なんでこんな大きな世界に生まれたのかと思うと、法蔵菩薩がご苦労してくださったからです。それは誓願不思議の道理として、本願の方に誓願不思議の道理としてある。本願の因と果の道理として本願の方に備わっている。だから私たちの責任は南無阿弥陀仏を称えて、本願に帰依するということが私たちの責任である。本願さえわかっただけで心配しないでいい、必ず仏になる。それを現生正定聚という。今の救いだというための大きな手続きとして、『観経』の六字釈はどう考えても死後の往生としか見えない。そうではないのだという手続きを名号解釈として取ったというふうに思います。頑張ってください。ちょっと休憩しましょう。

講義 2

それではもうしばらくお話をしましょう。暑くなって、かっとなってわっとしゃべったから、何のことかわからなかったと思います。黒板を見てもこれ何のことかわからんもん。誠に申し訳ない。それで、ほんとは先に進んだ方がいいのですが、もう一度六字釈、聖典176ページを開けてみましょう。今言ったことを思い出しながらもう一度読んでみましょう。「また云わく、「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿

弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり」。ここまでが六字釈ですね。「この義をもってのゆえに、必ず往生を得」(西169、島12-24)。これが善導大師の結論です。

六字釈の、南無、というのは南無阿弥陀仏の南無というのはもともとはインドの言葉で「ナム」という言葉だけでも、ここには帰命と発願回向という二つの意味があります。この帰命と発願回向ということ、すべて阿弥陀仏の方から満たしてくれるから、阿弥陀仏はすなわちこれを「行」というのである。だから「この義をもっての故に、必ず往生を得る」。これが六字釈の最終的な結論になるわけです。ですからこの間ある程度のことはお話しておりますので、この結論のところだけを今日はみてみましょう。

178ページです。これは親鸞の名号解釈です。『大経』による親鸞の名号解釈では今のところがどうなっているか、「必得往生」、善導大師が最終的に「必ず往生を得る」とこう言ってくれました。その「必得往生」と言うは、不退の位に至ることを獲ることを彰(あらわ)すなり」。まず不退の位、これは菩薩道の覚りの名前です。覚りを悟るから不退転に立つことができるということです。だから親鸞がここで不退の位という、これは覚りの位だから、これを表します。その時に、ここややこしいことを書いているでしょう。「不退の位に至ることを獲ることを彰すなり」と。必得と善導大師はこの「得」を使っているのに親鸞はそれを「獲」の字にかえている。これはずっと前に、ここでお話をしたことがあります。名号というものの「名」を因に、「号」を果に。「自然法爾章」です。いつか言ったことがあるよ。いつか問題になって質問して下さった方もいらっしゃったよ。

皆さんもう忘れていると思うけれども、510ページ(西621、島11-41)。「獲(ぎやく)の字は、因位のときうるを獲という。得(とく)の字は、果位のときにいたりてうることを得というなり。名(みょう)の字は、因位のときのなを名という。号の字は、果位のときのなを号という」。よくわからない話ですが、名号をわざわざ因と果に分けて、因の時は「獲」の字を使う。「得」と言う時は果の時に使う。こういう規則があるのです。だから親鸞はその規則にのっとって不退の位、覚りの位を得たのです。とこう言う訳です。その時に「得」の字を使う。得てしまって覚りを得たと言っているのではなくて、信心を獲たときに覚りの位を得たのだ。因の信心、これは信心の位だから、これは成仏と言ってもいい。だから親鸞がここで言いたいのは、南無阿弥陀仏と頭を下げて信心が起こったときに、その信心に覚りの位を得たのである。こう言っていることになります。間違いないですね。

だから覚りの位を得たからと言って、覚りを悟って仏になったというのではなくて、凡夫の身のままで、南無阿弥陀仏と頭を下げて信心を頂いたとき、そのままで悟りの位を頂いたことになる。こう言っていることになります。ですから、ここは言葉の字をよく見てごらん、必得往生、善導大師は仏になってしまう。命終わって仏になってしまうことを必得往生とこう言っているのですが、それは不退の位に至ることつまり、覚りを信心によって得ると言っているのである。『大経』にはそれを「即得往生 住不退転」と本願成就文にある。だから『大経』では、それを「即得」と言う。龍樹の「易行品」には「必定」と言う。この必定と言うのがさっき言ったように今の覚りだということ、龍樹を出してきたときには必ず今の覚りを言っている。だからこの文章をよく言葉を吟味しながら読むと今までのところはこういことです。

帰命と言う本願の信心には果の位である覚りを今得る、頂くということである。善導大師が必得往生とこう言ったのは、信心を獲た時に覚りに包まれるということを行ったのである。それと同じことを『大経』では即得往生と言う。「即得往生 住不退転」。これは本願成就文ですね。本願成就文では即得と言う。即得と言うのは今と言うことですから、龍樹菩薩はそれを必定と言った。これはどちらも今と言うことです。

もう一度言います。善導大師はあたかも命終わって往生を得るのだと果の字を使って、必得往生とこう言ってくださったけれども、それは因位の信心を獲た時に覚りをいただくということである。『大経』ではそれを即得往生と言い、龍樹菩薩は必定というのだと、その時の即と言う言葉は、願力を聞くによって信心をいただくということは本願の声を聞いた。本願の声を聞くことによって、「報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり」（東聖典178頁、西170、島12-26）。ここは難しいけど、必ず仏になる因が決定する時間を言うのだと、信心を獲た時に、聖道門では覚りを得るとこういうのであろうけれども浄土教では信心を獲た時に、その時に大乘菩薩道の不退の位、覚りの位をいただくのだと、それはこれから必ず仏になるという因が決定するということです。本願の声を聞くということ。そこに初めて凡夫のままで必ず仏になるという因が決定するということです。そういうふうなここに説かれています。

「**必**」の言は、**審**（つまびらか）なり、**然**（しからしむる）なり、**分極**なり」、最後に「**金剛心成就の貌**（かおぼせ）なり」。金剛心と言うのは、これは本願力回向の信心の姿である。ですから親鸞聖人は、この信心、本願力回向の信心、それが自の業識、必ず私が仏になっていくというこっち側の因です。そこにそれが決定した時に果の覚りがこっち来てくださる。しかし身が凡夫だから、これは言わなくてもいいが、わかっているね。身が凡夫だから、はじめてそこから命終わるまで、本願を生きていって『観経』で言うように、命終われば必ず仏になる。

弥勒菩薩は五十六億七千万年たった後に仏になるけれども、真の仏弟子、念仏の衆生は、僕は死んでも忘れないところ、250ページ、因の信心のところ大きな覚りの世界に包まれた、そういう感動をいただくのだ。それが本願力回向の信心の相と言うものだ。とこう書いてある。けれども逆に言えば、因で頂いたということは、凡夫の身はかわらないままです。凡夫の身のまま救われたのだから、この凡夫の身のままでこの念仏生活を送って行って、そして命終わる時にならず仏様の世界に帰って行く、そういう自信をいただくのだ。それが真の仏弟子の生活です。

だから真の仏弟子の結積、250ページに（「信の巻」、西264、島12-92）「**真に知りぬ。弥勒大士、等覚金剛心を窮**（きわ）**むるがゆえに、龍華三会の暁、当に無上覚位を極むべし**」。要するに弥勒大士は五十六億七千万年経たあとに龍華と言う大きな木の下で初夜・中夜・逮夜という三つの会座を開いてたくさんの人を仏にして、自分も仏になっていく。しかし、「**念仏衆生は**」五十六億七千万年経たなくても、「**横超の金剛心を窮むるがゆえに**」、これ、わかりますね、さっき言った「**金剛心成就の貌なり**」。信心を頂いて、信心のところには仏様の覚りを頂いた、こういう大きな感動を得ているから、「**念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す**」。命終われば必ず仏になる。こ

ういう信念を今いただいていることでもあります。とおっしゃったのが私の先生でした。亡くなる時に「延塚さん、親鸞聖人の仏教で一番大事なところはね、念仏者は臨終一念の夕べに大般涅槃を超証する、その信念を今いただいている、信心としていただいている。信心としていただいているということは、大般涅槃の中に、大きな覚りの世界に今包まれている。だから命終われば必ず仏になる。決まっているのです。」と松原先生が最後に言われました。さすがに偉いねと思って、真の仏弟子の結積をいわれましたから、だから私は念仏者として生きてきて、今、本当にありがたいと、死んでいけるものにまで育てられました。死ぬことが少しも怖くありませんと言っているのです。命終われば必ず仏の世界に帰って行く、その信念を今いただいている。今、大きな大涅槃の世界に包まれている。だから、命終われば必ず仏になる。それは当たり前だ。と言っているわけです。先生の遺言、最後がそれでした。今のところですか。おわかりいただけますか。

そういう今の信心は、身は凡夫であったとしても、果の覚りを悟ったというわけにはいかなないけれども、本願の因果の道理によって、私たちのところに覚りの方が来てくれる。包んでくれる。「煩惱、眼を障(さ)えて見たてまつらずといえども、大悲倦(ものう)きことなく、常に我を照したまう」(「正信偈」聖典207頁、西207、島12-53)、あれです。「煩惱の身のままで、心配しないでいい、仏様の世界の中にあるのだ。仏様の世界の中にあるということがなかなかわからないけれども、それは煩惱の仕業だから心配するな、念仏して必ず仏になっていく、それが本願の道理だから、心配するな、念仏しなさい。」というのが親鸞聖人の教えで大事なことかな。

そういう意味で浄土教は従来、死後の往生と死後の成仏を説いてきたのですが、親鸞聖人のところにまで来ると、龍樹の現生不退と即得往生、『大経』のその二つによって、因の信心のところに覚りの方が来るのだ。だから「獲」の字を因のところで覚りを獲(う)ると言う。「獲」を使って、そういう意味で六字釈を『大経』の名号解釈に変えた。それは視点を変えれば、今の救いを説く、そういう意図があって、親鸞聖人は六字釈を名号解釈に変えたのだというふうに了解してください。『観経』は未来の救いになってしまうけれども、『大経』は今の救いなのだ。それを身に叩き込んでおいてください。いつも思い出して考えてみてください。

それでそうなると、今言ったように行の巻は、親鸞聖人が七祖のところでご自釈を書いているのは名号解釈だけです。だからこの名号解釈は七祖の中で名号解釈というところが一番の山になります。いいですね、そのあと、これは言っても言わなくてもいいのですが、そのあと178ページのところから、法照(ほっしょう)。それから182ページになると憬興(きょうこう)『述文贊』。それから183ページの終わりの方になると『楽邦文類』、宗暁(しゅうぎょう)という人の書いた『楽邦文類』。こういうふうに、ここは善導大師以下、善導大師の後に生まれた仏教者たちが十一人出てきます。ここは読む時間がないから簡単に説明します。十一人だけど、昔から言われるのは「中国十師」と言われます。十人の人が善導大師以降に生まれた人たち、善導大師以降の仏者、実際は十一人出てきます。そしてここは昔から善導大師の教学を助頭(じょけん)と言うのですが、善導大師の教学を補うという意味で中国十師が出てくるのだという解説ばかりです。これまでは、まあそれもないことは

ないと思いますが、ここは六字釈を未来の往生ではなくて、仏の覚りを獲る今の覚りを言いましたね。ですから往生の結果である成仏、仏の覚りを獲るというふうに親鸞聖人の名号解釈をして、すぐ後ですから、しかもここは読んだらすぐわかります。

大事な言葉が出ますから、まずそこに印をつけてください。法照のところでは179ページ終わりから四行目、「念仏成仏はこれ真宗なり」（西172、島12-27）。その次の行「念仏三昧これ真宗なり」。真宗という宗名が出てきます。しかも念仏成仏です。往生ではなくて念仏成仏です。これは大変大事な言葉でしょう。往生をしてやがて浄土で修行をして覚りを得るのだと、こういうふうに言われるのだけれども、法照という人は念仏によって仏になる覚りを得る。「念仏成仏これ真宗」と言ってくれた。これが浄土真宗の宗名になるのです。「真宗」、この言葉と、これは善導大師の言葉ですが、「真心ありがたし」。この二つがもとになって、「浄土真宗」という宗名になっていきます。そしてこの十師のところをずっと見ると重要な言葉がいっぱい出てきて、そして、その全体は成仏と言うことを言っていると思われまます。ですから善導大師の六字釈の出た後に出てくるわけですから、善導大師の後にした仏教者たちも、全部念仏成仏と言うことを言っているでしょうと、そして仏の覚りを表している文章を中国十師として挙げているのだと思われまます。

それでここからは雑談だと思って聞いてください。雑談ではなくて、この『浄土五会念仏略法事儀讃』、これは法照と言う人が書いたのですけれども、この法照と言う人は善導大師のあと、善導大師の化身だと言われました。ですから、例えば善導大師の和讃をみますと495ページ（西589、島11-28）、これは『高僧和讃』の善導和讃の最初ですが「大心海より化してこそ 善導和尚とおわしけれ 末代濁世のためにとて 十方諸仏に証をこう」。これわかりますね。善導大師は中国にお生まれになったけれども、これは弥陀の本願海から生まれてきた人である。たまたま中国で善導和尚といわれたけれども、それは弥陀の本願よりこの世にお生まれになった方である。そして本願から生まれたのだから、末代濁世の凡夫のために教えを説いて、そして十方の諸仏に、仏さんたちに、自分の説いたことは間違いないでしょうと言って証を乞うたのである。わかりますね、阿弥陀の本願と言うのは、私がいつも言うように、凡夫も救うし菩薩も救う。根源仏ですから、全部阿弥陀の本願から仏の覚りは生まれてきた。だから本願を説く人は、どんな仏様も必ず褒める。だから善導和尚が本願から生まれてきて、善導としてこの世にお生まれになって、凡夫の救いのために、この世で命を尽くしてくださったけれども、十方の諸仏たちがそれでいいのだと言って証明してくださっている。

そんなふうに本願の海から生まれたのだから、次に「世世に善導いでたまひ」、善導たった一人ではなくて、善導大師の化身として、「法照 少康としめしつ 功德蔵をひらきてぞ 諸仏の本意とげたまう」。わかりますね。善導大師一人でなくて、善導大師のお弟子さんであった法照、少康と言う人たちは、善導大師の弟子ですけれども、その人がたちが功德蔵、如来の大きな覚りの蔵を開いて、そしてどんな仏も願っている本意をこの世で遂げてくださった。ここに法照 少康という名前が出てきます。ですから法照と言う人は善導大師の弟子なのだけれども、今言ったように大変尊敬されて、五大山で、『五会法事讃』と言うのは皆さん報恩講の時に、真宗でしたら音が上がっていくでしょう。最初低い声で「南無阿弥

陀仏」と、そのうち「阿弥陀仏う～」と上がっていく、そして最後は声が出ないくらいに高くなる。あれが五段階説かかれている。それは長安を流れている川の水の音を善導大師が聞いていたらしい、だから人間が作った音ではないのです。自然の音、聞いていると初重、二重、三重 四重 五重と五段階に高くなっていく、だからそれに合わせて、念仏も浄土の声だから、浄土の音だから、それに合わせて、念仏も五段階の高さで称えていきましょうというふうに決定したのが『五会法事讃』と言う書物です。ですから、これは南無阿弥陀仏の報恩講の時の儀式の作法が説かれている本だと考えてもいいし、逆に言えば善導大師が、私が申し上げましたように道綽、善導と善導大師が浄土の教学を大成させた。その大成させた浄土の教学を儀式にまで具体化したと考えてもいい、だから法照と言う人はたいへん偉い人だった。ですから、これ面白いのですが、先にいいましょうか、法照と言う人は唐の時代の偉い人だった。だから日本から留学した留学生も法照の所に行って勉強しました。

皆さんがよく知っている人から言うと、最澄が天台座主の最初の人、三代目慈覚大師円仁、この人は最澄の弟子です。けども座主としては三代目、この人が唐に留学して、この法照の寺に留学します。そしてこの法照の念仏を日本に引き継いで念仏三昧を説いている。と言うことでこの慈覚大師円仁は、法照の念仏三昧を比叡山に持ち込んで、そして比叡山の山の念仏に決定していきます。山の念仏と言うのは法然や親鸞が言う選択本願の念仏ではなくて修行の念仏、つまり仏を観ると言う修行に位置付けて、そして比叡山の念仏は、法照の『五会法事讃』をもとにしながら、比叡山の山の念仏に決定していくのが慈覚大師円仁です。

皆さんご存知のように親鸞は九歳から二十九歳まで比叡山で念仏を勉強したのです。ずっとこの山の念仏をやった。親鸞が引用している文章を読むと山の念仏ではなくて、称名念仏を称えて、そして凡夫が救われる本願の念仏を称える。称えなさいと法照は言っているのです。なのに、比叡山の山の念仏にしてしまった。それに自分は二十年も騙された。そこまで言わないけれどそうなのです。僕だったら言う、ふざけるなど、俺は二十年一生懸命にやってきたが、あれは嘘だったのか、というために一番最初に、ここに法照を挙げています。わかるでしょう、言っていることが、ふざけるなど、親鸞は偉いから、僕のようなきたない言葉は使わないで、法照をよく読んでみましょう。称名念仏と本願の念仏を説いていますねと、それから一番大事な「念仏成仏これ真宗」、これは法照が説いているでしょう。慈覚大師いい加減にいなさいと言わないけれども、そういう気持ちがかもっています。だから親鸞はえらいです、やはり、僕は品がないから、すぐそういうことを言う。品がないからそういうことを言うけれども、親鸞聖人は偉いのです。親鸞と言う人は偉い人で尊敬に値する。

550ページ6行目くらいからちょっと読んでみましょうか。(『唯信鈔文意』、西703～、島20-4)「また称名の本願は、選択の正因たること、この悲願にあらわれたり。この文のころは、おもうほどはもうさず。これにておしはからせたまうべし。」ここまでで一つ切れるのですが、その次、「この文は、後善導法照禅師ともうす聖人の御釈なり。この和尚をば法道和尚と、慈覚大師はのたまえり」。慈覚大師円仁は法照のことを法道和尚と言って山の念仏を作ったのですよと、暗にあります。そして、「また『伝』には、廬山の弥陀和尚とももうす。浄業和尚とももうす。唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり。このゆえに後善導ともうすなり。」ですね。そしてそのあと、「彼仏因中立弘誓 聞名念我総迎來 不簡

貧窮将富貴 不簡下智与高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使回心多念仏 能令瓦礫變成金」(五会法事讚)。法照の『五会法事讚』から引いています。これからこれの一つひとつ註釈していきます。だからここは文章の関係からすると後善導の法照禪師と言う方がいらっしやった。その法照禪師の文章を引いて、これから註釈しますよ、それだけの話です。

それだけの話なのにわざわざ「法道和尚と、慈覚大師はのたまえり」、比叡山の慈覚大師円仁が法道と言った。と言うのは暗に山の念仏を開いたのは慈覚大師でしょうと言っているわけです。けれどもそれを言わないところに親鸞の偉いところがあって、それを言わないで、いいですか、ここから法照の『五会法事讚』の文章を私が今から註釈をしますよと言って、長く註釈します。個々の大切なところ、みなさんよく知っているところ、552ページ(西707、島20-6)、「回心」というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。」よく使うでしょう。「実報土にうまるるひとは、かならず金剛の信心のおこるを、「多念仏」ともうすなり。「多」は、大のころなり。勝のころなり。増上のころなり。大は、おおきなり。勝は、すぐれたり。よろずの善にまされるとなり。増上は、よろずのことにすぐれたるなり。これすなわち他力本願無上のゆえなり。自力のころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。」素晴らしい文章の註釈でしょう。これは法照の『五会法事讚』の文章の註釈です。

ですから法照禪師はなにも山の、観仏、仏を観るとは言っていないでしょう。回心をして、凡夫のままで大涅槃に至る。本願力によると言っているでしょう。その次もまた素晴らしいです。553ページの3行目、「能令瓦礫變成金」というは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「變成金」は、「變成」は、かえなすという。「金」は、こがねという。かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りょうし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、摂取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りょうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとえたまえるなり」。素晴らしいでしょう。これは『五会法事讚』の文章を親鸞聖人がずっと慈覚大師の名前を出して長く註釈しているところです。

これをよく読むと、僕のような品がないものが言わなくてもわかるでしょう。『五会法事讚と』言っ、山では一生懸命見仏をするための修行として使った。だから法華堂と念仏三昧堂を廊下で結んで、にない堂(担い堂)とありますね。あそこでこの念仏三昧の修行を私は二十年間やったのだ。ところがそんなことを言っていないでしょう。今言ったように、回心すれば煩惱の凡夫がそのまま救われて大涅槃を生ずると言っているでしょう。というふうにならずここは『五会法事讚』の本当の意味を註釈しているところです。親鸞偉いでしょう。僕のような品のないことを言わないのです。でも、あえて慈覚大師円仁は言っているから、やはり俺は二十年騙されたと、きっとどこかで思っただろうと思います。ですから中国十師

の一番最初に法照を持ってきた。そして法照を持ってくると同時に「念仏成仏これ真宗」、これが大切、これは善導大師の言葉ですと言って、真宗は浄土真宗とこれで名告るのですが、けれどもももとはこれは法照禅師の言葉です。それをよく知っておいてください。それで例えば601ページ（西737、島21-2）、これは『末燈鈔』のお手紙です。

「浄土宗のなかに、真有り仮あり」これはわかりますか。法然上人の浄土宗の門弟の中に真実の門弟と自力が混ざった仮の門弟とがいた。ということになります。「真**というは、選択本願なり**」。実に明快ですね「仮**というは、定散二善なり**」。定散二善と言うのは自力、定善、散善の人間の自力、それが混ざったものが仮である。その次、「**選択本願は浄土真宗なり**」。ここに出てきます、「浄土真宗」。「**定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗の中の至極なり**」。わかりますね。と言うことは法然はおおらかな人だったから、親鸞のような本当の仏教者のような、それから鎮西の聖光坊、熊本の聖光と言う人も全部包んでいた。だから真実の弟子もおれば仮の弟子もいた。

鎮西の熊本はここから近いから、『口伝鈔』に載っていることを言いましょうか。『口伝鈔』を読んだらわかる（東聖典659～661頁、西887～890、島25-9～11）。聖光坊は法然のところで何年も勉強して、これでお師匠様おいとまして、熊本に帰って念仏を広めますと言ったら、「ああそうかわかった。」と言って法然が玄関まで送って出るので。そうしたら聖光が「帰ります」と言って帰って行くと、法然が大きな声で「おお。三つの髻（もとどり）を切らんで帰るか」と言ったのです。そうしたら聖光もやはり武士だったので「何、三つの髻と言うのは、あなたの弟子になった時に切った。髻と言うのは切った」。こう言ったのです。「いや、切れていない。髻は三つある。名聞・利養・勝他。名聞**というのは自分が偉そうにしたい。利養**というのは金もうけ、勝他**というのは人から勝ちたい。この根性が抜けていないのに鎮西に帰る気かね****」と言われるのです。そして説明するのです。名聞**というのは人から褒められたいからだろう。そしてここで勉強したノート、それをもって帰って講義をするの**だろう。それは金のために使うのではないか。というのです。法然きつことを言うでしょう。そして結局、お前は人から勝ちたいからだ、と言われたら、聖光は「わかった、そんなことを言うなら、今でいうリュックを逆さにしてそこの場所で火をつけて焼いた。そして「俺、帰るからな」と言って帰った。かっこよかったけど、やはりあの三つの髻は切れていなかったと親鸞は書いている。親鸞は偉いでしょう。だから法然は法然の弟子として弟子を全部抱えていたのです。浄土宗を独立しなくてはならないから、その時に親鸞のような本物の弟子もおったかもしれない。自力で頑張っている者も抱えていたから、ところが、やはり最後には法然は、ちゃんとそういうのです。偉いでしょう法然は、だから浄土宗**というのは真仮どちらもあった。けれども浄土真宗は違う。選択本願これなり、さっき言ったように本願に直結している仏道。これしか浄土真宗ではないのだ**と言っている。**

だからさっきの名号解釈、あれが浄土真宗の要になります。そうなるでしょう。今のところすごいでしょう。はっきり601ページ、そこのところに印を付けておきなさい。真宗の宗名のところ、「**浄土宗のなかに、真あり仮あり。真**というは選択本願なり****」。これは法然がこう説いていたし、親鸞もそうです。「**仮**というは、定散二善なり****」。「**選択本願は浄土真宗なり**」。ここに真宗の宗名があります。

もう一か所だけ申し上げます。今の宗名に関わって775ページ、これは蓮如上人が『御文』(おふみ)(西:『御文章』)の中でおっしゃっている文です。これは『御文』の一帖の十五通なのですが、大事な『御文』なのですが、終わりから8行目(西1105、島29-13)、「されば、自余の浄土宗は」、真宗以外の浄土宗はという意味です。真宗以外の浄土宗は「もろもろの雑行をゆるす」。真宗以外の浄土宗は自力の行も許している。「わが聖人は雑行をえらびたまう」。親鸞聖人は雑行を選んですてた。「このゆえに真実報土の往生をとぐるなり」。本願力によって、真実報土の往生を遂げる。「このいわれあるがゆえに、別して」、浄土宗ではなくて、別して、浄土宗に対して「真の字をいれたまうなり」。浄土真宗とした。わかりますね。そこも印を付けておいてください。真宗と言った時には本願。これ一つね、選択本願これ一つ。ここから見てもわかるでしょう。親鸞が今日申し上げた名号解釈をしたこと、それが浄土真宗の行だと言っていることになります。少し残業をしましたが、今日はここまで。

質疑応答

質問者1 (田畑先生)・・私から一つ、両重因縁と言う場合、光明名号と言う言い方をしますね。私たちは、名号と言うのは南無阿弥陀仏だと。南無阿弥陀仏というのは、アミターバ、アミターユスで光明無量、寿命無量で、光明名号になると重なるような感じがするのです。頭の中では、ただ名号と言うのは本願を代表して名号と言われているのかと思っているのですが、そのへん、どう整理したらいいのでしょうか。

先生・・名号と言う時には、やはり南無阿弥陀仏です。そして先生が今おっしゃったように、南無阿弥陀仏には二つのはたらきがある。だから南無阿弥陀仏のはたらきをいうと光明無量、寿命無量。これがはたらきになります。したがって名号と言って光明無量と、つまり光明名号と言う場合は、光明と名号ですから南無阿弥陀仏で先生のおっしゃった通りなのです。その場合は、本当は寿命無量も言わなくてはいけないのですが、善導大師の場合は光明名号です。代表させる。なぜかという光明にあわないと寿命無量が決定しないから、例えば、みなさんいっしょに勉強した時に、お釈迦様が阿難に説法したときに、阿難は「光明無量に遇った」と先に言うでしょう。教えが光と言う意味を持って私に届いた。それが南無阿弥陀仏の第一のはたらきです。光明としてこちら側に突き刺さった。そして人間がわからないことを見抜いてくださって、そして二の相対分別のところには地獄のもとがある。それを超えて無量寿に立ちなさい。というように光明によって無量寿を指し示している。だから南無阿弥陀仏と言う場合には、体は、体と言うのはもともと本体は南無阿弥陀仏であり無量寿如来なのです。体は、だから親鸞聖人は体の方を先に言った。帰命無量寿如来、これが体だから寿如来の体と同時に光明も含んでいる。寿命と名号一緒だと、名号の体は無量寿如来だから、ですから南無阿弥陀仏と言う時に、南無阿弥陀仏の体は無量寿如来だから、だからこれは名

号と言う時に、名号の中に体が収まっている。そうみて、それが光明としてはたらきだして、私たちに届いてくださるから、だから善導大師の場合は、光明と名号この二つで代表させた。と考えたらどうでしょう。と思います。

親鸞の場合は、皆さんご存知のように、体の方を先に言うから、帰命無量寿如来、南無不可思議光、その場合もうちょっと言葉を加えると、南無阿弥陀仏、南無不可思議光と言ってもいい。まちがいではない。寿命の体と名号とはこれは一つだ、善導大師はそう見た。だから名号の父、光明の母と。

質問者 1 (田畑先生)・・・光明でまず照らし出されて、初めて展開が起こる。

先生・・・だから、はたらきとしては光明しかない。そして光明のはたらきによって寿命無量に展開される。だから一番大事なはたらきは光明だし、だからその光明のはたらきを、はたらきださせるのは名号だから、だから名号の体は無量寿だけ無量寿と光明と言わないで、やはり南無阿弥陀仏の方を先に出したのですね。そこらへんは善導大師の偉いところではないでしょうか。

質問者 1 (田畑先生)・・・ありがとうございました。

先生・・・あまり説明になっていませんが、そういうふうに思います。

質問者 2・・・すいません。今のお話の流れでお伺いしたいのですが、「正信偈」で帰命無量寿如来、南無不可思議光と出てまいります。一言で言ったら、帰命無量寿如来も南無不可思議光も南無阿弥陀仏と言うことだと思のですが、それを南無阿弥陀仏といわないで、帰命無量寿如来、南無不可思議光と歌い上げた理由はなんなのでしょう。

先生・・・南無阿弥陀仏と言うのは、南無阿弥陀仏だけで意味がわかりますか、これはもともとインドの言葉で、ナムアミターバという言葉音を音にあてたものです。だからこれは音写と言います。ナムアミターバという言葉漢字にあてて南無阿弥陀仏にしたのです。それと同じようなものはいっぱいあります。そういう言葉は、つまり翻訳できない。

質問者 2・・・つまりその意味はわかりました。

先生・・・そうすると南無阿弥陀仏は意味がわからない。けど、帰命無量寿如来の方、これはよく見ると意味がわかるでしょう。漢字に意味があるから。南無阿弥陀仏は「南が無い」と書いてあるが南が無かったら困るでしょう。マージャンもできないでしょう。それは意味がないからです。音写だから、ところが、その音写のナムアミターバをいただいたときに、はっきりと意味のある言葉として親鸞聖人は答えた。その答えが無量寿、私たちが量(はか)ることができない如来の大きな命にいのちを返します。そのためには、私がいつも言ってい

るように、私が私がと言う根性を破る不可思議の光として仏様のいのちが、今届きました。これが「正信偈」の意味だから、そしてこれを南無阿弥陀仏と言ってしまうと意味がわからない。それを私がいただいて、私はこういう意味で南無阿弥陀仏をいただいた。ひとつは光としていただいた、もうひとつはそれによって無量のいのちに立つ、これが「正信偈」の親鸞聖人のお答えになると思います。ですから、どうしても、きちっと漢字で意味のある言葉で書き直さなければいけなかった。そこに親鸞聖人の責任がありました。素晴らしいところがあります。

質問者 2 ・ ・ それでしつこいようですが、そこから歌いだされたということに意味があるのでしょうか。

先生 ・ ・ それは南無阿弥陀仏からしか仏教は始まらないから、聞いている意味がわからない私には。

質問者 2 ・ ・ 私にも問うている意味がもやもやするものがずっとありまして…。

先生 ・ ・ 南無阿弥陀仏からしか仏教は始まらない。

質問者 2 ・ ・ まあそうですが、非常に突拍子もないと言うか…。

先生 ・ ・ それはもしかしたらそう聞こえるかもしれない。私は長い間、必死に比叡山で悩んだのです。苦勞してわからなかったのです、と言う前段がなくて、ある日突然「お釈迦様が光顔巍巍と輝いています」と阿難がいったのといっしょだから、教えにだって南無阿弥陀仏が届いたところから始まっていますから、私たちには唐突に聞こえます。

質問者 2 ・ ・ そうするとやはり、その「偈前の文」の中に『大経』に帰依して、七高僧に学んだという言葉が出てまいります、そこで賜った世界というものを踏まえてそう言うておられるということなのでしょう。

先生 ・ ・ 一応そうです。一応そうですが、相対的に言うると一応そうです。しかし絶対的にいうと、私はこれで救われた。これしかありません。と言うところから始まっている。

質問者 2 ・ ・ すっきりしました。

先生 ・ ・ だから親鸞聖人としては実に明快なところから始まっているのではないのでしょうか。私はこれによって救われたのです。相対分別を超えて、無量のいのちに帰った。それは本願の教えが光として届いたからです。だから私はこのままで救われたのです。と言うところから始まっている。

感動しないと歌にならないもの、シンガーソングライターでも自分が感動して書くのです。それもこれに一番感動したから、あれはどこだったかな、僕らが感動するとき、例えば、皆さん素晴らしいレストランに行って、食べたことのない料理を前にしました。いいですか、食べました。その時に、「ああこれは七高僧が言っているようにフランスから来たカモで、このバターはどこやらのバターで、どうじゃこうじゃと言うよりも、「うまい！」としか始まらないでしょう。

「まさか！しんけん！」と言うくらいびっくりするでしょう。食べた時に、例えばビールでも飲んで、今日は汗をかいたからうまいのだというのは、それは後からついてくることで、「うまい！」と言うでしょう。そこから始まっている。「やった、救われた」と言うところから始まっている。だから「帰命無量寿如来」から始まっているのです。それでどこもおかしくない。だって料理を食べて「うまい！」、ビール飲んで「カー！」と、そこからしか始まらないでしょう。それをうじゃうじゃ七祖がどうだとか、フランスだとか今日暑かったから、汗をかいたからと後で理屈は付きます。帰命・ここから始まる。というものです。だから救われたという感動からはじまっているのです。あたりまえのことです、わかるでしょう。そういうことです。

質問者 3 ・ ・ 質問ではなくて、そうだと思った。

先生 ・ ・ そうだね、「カー！」うまいねとしか言わない。

質問者 4 ・ ・ とてもおかしい質問かもしれませんが、感想です。善導大師とか、今日先生がおっしゃった中国十師と言う、そういう偉いお坊さん方が中国ではたくさんお出になって、聖徳太子とか日本の仏教のもとには中国から来ていると言います。ところが聞くところでは、今日の日本ではアメリカの方とか日本、ネパールの方が仏教に熱心とか、中国では今は仏教を深くそれなりに求められているのでしょうか。

先生 ・ ・ 今の中国は難しいです。共産党が握っているから。

質問者 4 ・ ・ ロシアの戦争もなんか中国はいいように言っていますが…、ありがとうございました。

質問者 5 ・ ・ 「信心の業識」という言葉ですが、一応こうかなと思っていますが、これは因縁業果報の「業」、その業の認識、つまり由来と言うか、由来及び行先その全体と言う意味でしょうか。

先生 ・ ・ そうです、そういうふうを考えて下さい。

質問者 5 ・ ・ そうするとこれは信心の業識と言うと認識の主体は仏様ですね。

先生・・難しいことを言うなあ。岡田先生が何を聞いているかよくわからないから答えようがないのですが、参考になるかどうかかわからないが、縁のところは、法然は外縁と言いました。業識のところは法然は内因と言いました。それは素晴らしい言葉だと思います。だから内因というのだから、こちら側の因になる。それは親鸞の教学を通して言えば本願力回向の信心だから、主体は仏さんだというふうに言える。言えるけれども、信心があるかないかと言うふうな言い方をする場合には私の内因と言うふうに言う場合もある。場合によっては違う。根源的には本願力回向の信心なのだから、それは、主体は仏さんですねと言われるなら、そうだと思います。しかしそれは親鸞を通して言えることです。

質問者 6・・先生、「自然法爾章」のところ、510ページのところで必得往生という不退の位に至るで、「獲」は因位時に言う。「得」は果位の時に言うと、先生、僕らは因位とか果位とか言ったら、法蔵菩薩因位時、法蔵菩薩が因位の時に阿弥陀仏が果位になったと言う時にくらいしか使わないのですが、先生はここで、因位と言うのを信心と言われた。果位を覚りと言われた。これがわからないからわからないのですが、その辺をちょっと説明をしていただけませんか。

先生・・これは行の巻の不虛作住持功德、行の巻の一乗海のところ、198ページ後ろから4行目（西197～、島12-45）、世親の『浄土論』では、「何者か莊嚴不虛作住持功德成就」、ここは一乗海とか、願海と言う流れの中で言っている。親鸞は、だから一乗海と言うのはこれは覚り、仏様の覚りと言うものを世親菩薩は不虛作住持功德で「仏の本願力を観ずるに、遇（もうお）うてむなしく過ぐる者なし、よく速やかに功德の大宝海を満足せしむるがゆえにと」、こう世親は歌った。

この中で特に能令速「よく、能、せしむる、速、満足せしむる」人間の根源的願いをよく満足させてくださる仏様の覚り、功德の大宝海、これを世親菩薩は『浄土論』で歌ってくださった。ですから、この功德大宝海という海ということが浄土教の覚りの名前だと考えて下さい。浄土教にも覚りがなければ大乘仏教になりません。ですから、今日言った阿難がお釈迦様に遇って初めて覚りに救われたという感動を、あれを世親は「能令速満足 功德大宝海」と、初めからあった一如の海のような世界に生まれたんだとこう言った。これが世親の歌です。それで「不虛作住持功德成就は、けだしこれ阿弥陀如来の本願力なり」。本願力によってそういうことが実現するのである。「今まさに略して、虚作の相の住持にあたわざるを示して、もってかの不虛作住持の義を顕す。」と言って乃至されている。ここはもういい。「言うところの不虛作住持は、本（もと）法蔵菩薩の四十八願と、」これが因。「今日」というのですから、今日というのわかるね、「今日世尊、光顔巍巍とましまして」と阿難が叫んだね。五徳現瑞で、あれ全部「今日」でしょう。だから、本法蔵菩薩の四十八願が因となって、「今日阿弥陀如来の自在神力」。これは人を救う仏のはたらき、覚りのはたらき、これが果。だから「願もって力を成ず」、因の法蔵菩薩の本願によって、阿弥陀如来の覚りの本願力を実現してくださる。「力もって願に就く、願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相符（か

の) うて畢竟じて差(たが) わず。かるがゆえに成就と日る」。因の法蔵菩薩の本願と果の阿彌陀如来の覚りとが、いつも相互に成就し合うこと、それが本願の成就というのだと。因の本願と果の覚りとが相互に成就し合うこと、これが誓願不思議の本願力が実現するはたらきなのですよと。このはたらきによって世親は「観仏本願力 過無空過者 能令速満足 功德大宝海」と歌ってくださったのですよと言う註釈です。

ですから彼が言うように因の法蔵菩薩の本願と果の覚り、これが本願力と言う時に必ず二つのはたらきが実現していること、それが本願力です。だから私たちが「本願力に帰した」と言う時には、因の法蔵菩薩と果の覚りとが同時に成就する、そういう信心の所に立ったのだと、こういうことになります。それを今度は、私たちの、私のところで言うと、因の信心は必ず果の覚りに向かって帰ります。だから因の信心と果の覚りとはいつも実現し合っていますよと言う言い方をしても間違いではありません。だからあなたが言っているのは正しい。因の法蔵菩薩と果の覚りとがいつも実現し合っている。しかしそれを知るのは信心だから、信心の時に「覚りを悟った」と言うふうに親鸞は果の方に立つのではなくて、因の方に立つから、だから曾我さんは「法蔵菩薩は我なり」と言いました。私たちは凡夫だから、法蔵菩薩のところに立つのだと、だから凡夫として呼び覚まされると、法蔵菩薩の本願に呼び覚まされた時には、私たちは凡夫の身として呼び覚まされるから、だから私たちは因の本願に、本願と相即している。因の本願に呼び覚まされて信心をいただくということになる。だから因の方に立つ。

質問者 6 ・ ・ 先生のおっしゃることはよくわかるのですが、私の領解では信心というのはイコール覚りだと思っている部分があるのです。だから信心を因位と言い、覚りを区別して果位というのは何か違和感があるのです。

先生 ・ ・ 君に違和感があるだけで、もし君が言うように言うのだったら、それは聖道門になります。覚りを悟ったということになります。果に立つのなら、覚りを悟ったということになってしまいます。因と果を区別しなかったら、そうしたらあなた覚りを悟ったのかという話になるから、それは嘘でしょうと。その話しにしかならない。だけど因の信心に立って覚りをいただくのだと言ったときには、凡夫の身に帰ったということだから、そこに因位と果位の違いがある。違いを明確にしないと、これは観念だから、覚りを悟ってしまったという話しになってしまうから聖道門と同じようになってしまいます。だからそこが大事なのです。親鸞は絶対動かさない。どこまでも因の方に立つ、だから「獲」を使う。凡夫の方に立つ、法蔵菩薩の方に立つ、だから向こうから覚りが来ると、こういう言い方になる。そこは大事なのです。いきなり「因と果と一緒にしよう」みたいなことを言い出すと、お前、覚りを悟ったのかと言う話になってしまう。それは絶対言ってはならない。浄土真宗は、そこが大事だと思います。

質問者 6 ・ ・ はい。ありがとうございました。

田畑先生・・ありがとうございます。一応これで終わらせていただきます。(恩徳讃、終了)